

文芸研ハンドブック

『文学にみる日本の女性』

西郷竹彦 講演

主 催

小樽市PEA連合会

と き

小樽市緑小学校七十五周年記念協賛会
一九九五年 九月七日

と ころ

小樽市立緑小学校

主催者の方から「日本文学の中の女性」、しかも、それに
つけ加えて、これから女性はどう生きるのか、ということも
テーマにしてという、大変に欲ばったことを言われました。
緑小学校というと思い出深いものですから、気張ってやっ
てみようと思ったのですが、いざ、始めてみますと、これが大
変なんです。なにしろ、日本文学の歴史という古い万葉か
ら始まって、源氏物語、江戸に入りますと近松、西鶴。明治
以後はまたこれ、百年あまりの歴史がありますから、その中
の主な作品を取り上げるだけでも、たちまち二十や三十の本
になります。その中から、五点から六点の作品を取り上げる
となりますと、お読みになっていない方もあるでしょうから
内容を語しているうちに、作品の紹介で終わってしまいます。
そこで、看板に偽りありとなりましたが、文学という広い
ですので、「詩」にしぼって、と考えました。それも、近代、
現代、明治から今日までの詩の中の女性と範囲をかぎって
みましたが、これまた、おびただしい数なのです。が、お話を
具体的にしませんと解って頂けないので、的をしぼって
みました。女性といってもいろいろございますが、この会
はPTAの集まりですので、ほとんどお母さん方ですよ。そ

れなら、いっそのこと、母にしぼる。それなら、何とか具
体的にお話できるのではないかと思ひまして、皆様のお手
元に差し上げているような、島崎藤村から、今日の詩人の
作品を一通りざあっと拾い上げてみました。全部取り上げ
ることはできませんので、お帰りになりましたから、触れ
られなかった詩についてはご自分でお読みになりお考え
下さることを、最初にお断りしておきたいと思ひます。

「美化された母親像

ところで、文学の中の女性ですから、現実の女性
ではない。現実の女性がモデルになっていると思うのです
が、作家が、あるいは詩人が、自分の見方で、女という
ものを捉え、あるいは妻というものを捉え、自分が考
える女性像というものを描き出しているのです。だから、
これから取り上げる女性、それぞれの時代にそれぞれの詩
人が、どういうふうに見たかというものを、母という
ものを見たい。あるいは妻というものを、母というものを
見たかということのお話になるわけです。しかし、作家
というものはその時代に生き、その時代の人間の悩み
を自分も一緒に悩んで書いていますから、そこには現
実の女性の喜び、悲

しみ、悩み、幸せ、罪、過ちやらがまざまざとリアルに浮かび上がってくる、したがって、文学の中の母親像、女性像ではあるけれども、その時代を生きた女性のリアルな姿が映し出されてくるわけです。

では、本題に入りたいと思います。おおまかに、かけ足で明治から今日までの、詩の中に現れた母親の姿というものを申し上げてみますと、明治、大正、昭和の初期、戦前の詩のほとんどは、母親をたたえる詩です。母親というものを美化するというか、理想化されているというか、いつてみると、男である作家、詩人が、夢に描いている理想。現実の自分の母親というのはいくらでもないところが一杯あると思います。生身の人間というのは、作家の鋭い目で見ますと、傷やら汚れやらをいっぱいもって生きていると思うのですが、詩の中の母親というのは、この世にはいそがないようなすばらしい母親像、いつてみると、詩人の憧れ、私たち男の憧れのような母親像が描かれていることが多い。女房やほかの女の人の悪口は言っても、母親のことを語ったり、思い出したりするときには、どこか理想化する傾向というのがあります。でも、同性の女の詩人が母親を描くとすると違ふ。同性だけ

らでしようか、厳しい目で、ずばりと母親、女、妻を描き出しています。後で詩を見て頂くと分かると思いますが、とにかく、いろいろな母親像が出てきます。一方は、非常に理想化された美しい母親像が、一方ではこれが母親といていいのかといううなすさまじい母親像が出てくる。そこでみなさん、全部モデルは出てきますから、胸に手を当てて、私はこのなかのどの母親か、あるいは、一部はこれに当てはまる、一部はこっちななどといった見方もできるかもしれません。

「リアルな生身の母親像

母をたたえる詩というのはいちよつとばしまして（読んで頂ければ分かりますし、私が解説するまでもありませんから）四枚目にいってください。室生犀星の詩「過失」という詩。室生犀星という人は、金沢に犀川という川がありまして、そのほとりに生まれた。その出生の秘密というのですか、犀星の父と、小間使いとの間に生まれたという事情がありまして、生まれてすぐに人のところへもらわれていくのです。母親である人は、遠いところへやらされたという事情があって、結局、終生母親の顔を知らないでしまった。そんな自分の幼年

時代、少年時代を作品にも書いていますが、その母親を歌った詩です。

過失

犀星

若き日のあやまちを

きみもまたなしたまひしか

過ちは遂つひにあやまちにはあらず

母びとよ

われ生きてもの書くすべを覚えければ

いまして過ちをたづね参らすべし

いまして悲しみをつづり参らすべし

〈若き日のあやまちを / きみもまたなしたまひしか〉

この〈きみ〉というのは、母親を指していつているのです。

〈過ちは遂つひにあやまちにはあらず / 母びとよ / われ生

きてもの書くすべを覚えければ / いま自分はこうやって、

筆をとって小説を書くという立場にある、 / いまして過ち

をたづね参らすべし / いまして悲しみをつづり参らすべし /

つまり、犀星は、自分の母親の過ちといっているのです。これは、世間の常識からですけれども、しかし、そういう過ちというのは人間誰にでもあるのです。犀星自身もあるそういう、人生の経験を経て、自分の母親の過ちを自分も、また人も、人間である以上誰もが犯すに違いない、と、母親の過ちを温かく見守ることができたわけなんです。母親の、世のわたちの、妻たちの過ち、その過ちは余儀なくされた、過ちを犯さざるをえなくして犯した過ち、それを温かい目で捉え、描くとそういう詩なんです。もうひとつ、犀星に「良い心」という詩があります。

良い心

犀星

月のごとき母は世にあるまじよ

良きごころのみ保たもてる女もあるまじよ

われら良しとなすもの

われら恭うやまつふものに何時いつの日か行き逢あはなむ。

何時かまた月のごとき母に逢はなむ。

へ月のごとき母は世にあるまじよへお月様のような清らかな、美しい母というのは、世の中になんないはずだ。へ良きころのみ保てる女もあるまじよへ良い心だけをもってゐる女というのもこの世にあるはずがない。そのとおりですね。これは、思いやりの言葉だと思います。自分の母親が若い頃、過ちを犯し、その結果生まれたのが自分である。その結果を嘆いたり、憎んだりという気持ちがずっとあった、しかし今はそういうものを乗り越えた。人生の経験を積んで、こういうことが言えるようになってゐるわけなんです。へわれら恭ふものに何時の日か行き逢はなむ。／何時かまた月のごとき母に逢はなむ。へ月のような母に、いつか会いたい。会えるだろう。それは結局、自分の心の中に、月のようなイメージを、ふくらましふくらましていって、それがまた作品にもなるということでしょうね。いってみると、これまでの作家たちが、母親を月のように理想化して描いてきた、そういう歴史の中で、室生犀星は、生い立ちがそういう人です。から、初めてこういう、母親を歌った詩が登場してきた。明治以後の小説家、詩人というのはほとんど、いい家の生まれなんです。地主の出身であったり、高度な教養をもつ

た人が小説家であったり、詩人であったりするのです。ところが、室生犀星という人は、小学校もろくに行っていない。市役所のような所の給仕みたいなことをして、自力で本を読んで学んで、詩を書き出したんです。教養のある人の書く詩と違って、どこか文章が怪しい。国文学者だとか、文法学者とかが雑誌などで文法の誤りを指摘するのに、犀星の詩をよく例に取り上げたりしました。当時の詩は、文語です。昔の中学とか高等学校以上の教育がないと、正しく書けない。ところが、小学校もろくにいかないような犀星にしてみると、とても、文語の文章をきちんと書けない。怪しいところがある。そういうところをつつかれ、槍玉に挙げられるんです。それで、犀星は晩年、自分が若い時に書いた詩を全部集め、あちこち手をいれ、文法的に全部直して、それを自選集といつて、自分で選んだ詩集として世に出した。ところが、一般の人たちも詩人も、前のほうがいいという。何かどこか怪しげな、どこか教養のなさ、言葉の使い方や文法にも出ているのですが、何ともいえない味があった。犀星ならではの独特の犀星節があった。前の方がおもしろい、というところになって、結局、文法的にきちんと直したものが、だ

めだということになったんですね。これは、文芸というもののひとつのおもしろさだと思えます。

さて、犀星は、非常に貧しかった。いわば、日陰の人として育った。だけに、いいところの坊ちゃんであった作家、詩人たちとは違ったひとつの母親像というものを描いている。私たちは理想化された母親像、資料の一つ三枚目に描かれているような母親像を、「ああ、母親とはそういうものなんだ。」という郷愁を感じることもありますけれども、現に目の前にいる母親を見ると、どうも何か違うのではないか、あまりにも理想化されているのではないかという気がします。やっぱり、犀星の描く母親というのが身近な母親として感じられません。母親である皆さんも同じような過ちを犯さないと限らない。人間、何時過ちを犯すか分からないから人間なんです。神様ではない。そういうふうと考えてみますと、犀星の詩というのは、実にリアルな、人間の温かい生身に触れるような優しさを感じられる詩だと思えます。

【手かせ足かせとなる母親

母親というのは、たとえば息子にとって、ありがたい存在

であるともいえるのですけれども、反面、非常に困った存在、手かせ足かせとなる存在です。みなさん、そういうふうな思っているんじゃないと思えますが、これからいくつかの“証拠”を挙げますから、もしかすると、母なる私も、自分の息子や娘の手かせ足かせになっているのではと、思い当たるところか、胸が痛くなる詩も取りそろえていますから、これからご披露致します。(笑)

まずは、大江満雄という人の「古い機織部屋」という詩があります。

古い機織部屋

大江満雄 つちお

ふりむくとき

古い機織部屋はかりが見える。

(あれは おかあさんの機織部屋。)

ふりむくとき

機を織る音がきこえる。

(あの部屋で おかあさんが機を織っていた。)

ふりむくとき

古い大きな屋敷が見える。畑が見える。山が見える。

(あれは おかあさんの生れた家 生れた村。)

ふりむくとき

鐘の音が聞こえる。

(あれは 三十年まえの夕ぐれ 時は連続し

このように不連続。)

ふりむくとき

海辺の山が見える。

(あそこには おかあさんの墓がある。)

ふりむくとき

波の音が聞こえる。

(あそこで おかあさんと貝がらをひろった。)

ふりむくとき 　　ふりむくとき

無量の愛をうちにしたときに 別れを告げよう。

(わたしたちは前へ すすまなければならぬ

から。)

大江という人は、高知県の足摺のほうの出身で、若くしてプロレタリア詩人となった人です。そして、故郷を出て、貧しい人たちのために志を立て、国を出ていった人です。その、国を出るときの思いをうたった詩です。古い機織部屋というのは、自分の母親が働いている部屋です。へふりむくとき 古い機織部屋が見える。へこれから、前に向かって歩いていくんだ、歴史を前向きに生きていくんだ、こういつて出たもの、やはり振り向くわけです。自分のふるさと、あるいは自分の家。あるいは、そこにいるであろう母という人、後ろ髪をひかれる思いがある。へふりむくとき / 機を織る音が聞こえる。 / (あの部屋で おかあさんが機を織っていた。)

へふりむくとき / 古い大きな屋敷が見える。畑が見える。山が見える。へやはり、未練なんですね。執着なんですね。男が志を立てたとき、さて、郷関を出ず、といつてもですね、ただ前ばかりを見ているわけではない。私なんかも、

若いとき、父母を失いまして、単身上京したのですが、希望に燃えて前を見ていったのですが、やはり、後ろ髪を引かれるものがいっぱいあった。息子である人間の後ろ髪を引くのが母なんです。へ（あれは おかあさんの生まれた家生まれた村。）へふりむくとき／鐘の音が聞こえる。／（あれは 三十年まえの夕ぐれ）へ実は、自分が、若いときに故郷を出たときのことを思い出しているんです。へ時は連続し／このように不連続。）へずうっと時は連続しているが、昔のことは昔、今は今であると。へふりむくとき／海辺の山が見える。／（あそこには おかあさんの墓がある。）へお母さんが出てきて、お父さんが出てこないのは、私としてはものたらんですが、（笑）子どもですね、授業なんかで話していると、お母さんはよく出てくるのですが、なかなかお父さんというのは出てこない。そういう意味ではお母さんというのは大変に得な立場というか、それだけに子どもにとってのはしがらみになるんですね。悩ましい存在です。へふりむくとき／波の音が聞こえる。／（あそこで おかあさんと貝がらをひろった。）へ小さい時の思い出でしょうね。そして、最後にこういつているへふりむくな ふり

むくなへ自分に言っているんですね。へ無量の愛をうちにしたときに 別れを告げよう。へその計りがたい愛を感じれば感ずるほど、そこにどっぷりと浸っていたのはいかんだぞ、それに決別して、前進しよう。へ（わたしたちは前へ すすまなければならぬ）これがねえ、男ってもんなんですよ。（笑）そういう男にするのも母親なんです。

□母の胸を蹴る

それでは、萩原恭次郎、戦前の詩人です。今あげているのは、戦前の詩人です。「愛は終了され」です。

愛は終了され

萩原恭次郎

母の胸には 無数の血さへにじむ爪の跡！

あるひは赤き打撲の傷の跡！

投石された傷の跡！ 齒に噛まれたる傷の跡！

あゝそれら痛々しい赤き傷は

みな愛児達の生存のための傷である！

忘れられぬ乳房はもはや吸ふべきものではない

転居の後の如く荒れすたれ

あゝ、愛はすでに終了されたのだ！

さるを今 ふたゝび母の胸を蹴る！

新らしき世紀の恋人のため！

新らしき世界に青年たるため！

あゝ、われ等は古き父の遺産を

見事に破壊するを主義とする！

へ母の胸には 無数の血さへにじむ爪の跡！／あるひ

は赤き打撲の傷の跡！／投石された傷の跡！齒に噛まれ
たる傷の跡！／これは、実際に噛まれているわけではない。

比喩、象徴といつてもいい。母というのは同時に妻であり、
女である。いろんな傷を背負って生きているわけです。へあ

ゝそれら痛々しい赤き傷は／みな愛児達の生存のための傷
である！／自分の大切な子どものために自分を犠牲にして

いる。横暴な夫、本当は別れた方が自分の幸せと思つても、

子どものために夫の横暴にも耐える。心も体も傷つくが、そ

れは愛児のための傷なのだ。これは、しかし、母親が言つて

いるのではない。息子が言っているのです。へ忘れられぬ

乳房はもはや吸ふべきものではない／転居の後の如く荒れ

すたれ／あゝ、愛はすでに終了されたのだ！／息子も大き

くなり、母親は年老いて、見る影もない。つまり、皆さんの

明日の姿であります。(笑)今の姿の人もちらほら見えるよ

うですけれども。(笑)そういう、乳房などにいつまでもし

がみつくな、といっているのです。これは、自分に言つてい

るので、自分に、もう吸うなといっているのです。甘えるな

ということ。へさるを今 ふたゝび母の胸を蹴る！／

母親の胸を蹴つてそこからとび出せといっているのです。

へ新らしき世紀の恋人のため！／新らしき世界に青年た
るため！／あゝわれ等は古き父の遺産をへ父の遺跡とい

うのは母親のことです。だからこそへ見事に破壊するを主
義とする！／といっているのです。何か、冷たくひどい息

子を連想させますが、ひとたび、世のため人のためにといひ
ますか、主義主張のためには、決然として母親の胸を蹴つて

というような決断を迫られるわけです。そういうとき、

皆さん母親はいかなる態度をとるべきか。いつか、皆さんの
お子さんが、皆さんの胸をあらうことか蹴って、たいへんな
痛手を追わせて世界に飛び出していく日が来るのだというわ
けです。何のために、苦勞してここまで大きくしたんだらう
なんてぼやかさないで、よくぞ、立派な青年に育ったのだと、
送り出して下さい。

□足を引っぱる母の愛

ここから、戦後の詩人です。

谷川俊太郎、今、売れっ子の詩人です。現代の詩というの
は、抽象画を見るようなところがあります。写真のようでは
なく、ピカソの絵のようなものです。まだ、目なら目と分か
るならいいんですが、分からないものもあります。現代詩は
そんな抽象画に例えることができます。しかし、それはそれ
で面白みがあるのです。リアルな詩とは違ったね。「おつか
さん」です。

おつかさん

谷川俊太郎

地球はジェット機をつかまえて
大地の胸に抱かかこうとする

地球は潜水艦をひきずりこんで
海の子宮しむすうにかえそうとする

宇宙にやきもちをやいている
わからずやのおつかさん

地球はあいかわらず
私たちの足をひっぱる

私たちはもう思春期だつていうのに
もうそろそろ月にさわろうという年頃なのに

〈地球はジェット機をつかまえて / 大地の胸に抱こう

とする。ここで、地球をお母さん、ジェット機を息子と考
えて、ということは、地球の引力に逆らって飛ぶ、つまり、
母親の愛情の力にさからって。それに逆らわれないと飛べない
のです。へ地球は潜水艦をひきずりこんで／海の子宮に
かえそうとする。へすさまじいですね、女というのは。震え
てきますね。それほど権力、引力を持っているのです。

へ宇宙にやきもちをやいている／わからずやのおつかさ
さんへ壮大なやきもちです。ね。(笑)へ地球はあいかわらず
／私たちの足をひっぱる。へ引力というものをそういうふう
に比喩しているのです。へ私たちはもう思春期だつていう
のに。へもう一人前の人間だというのに、へもうそろそろ月
にさわるうという年頃なのに。へそういう年頃なのに、母親
は子どもを抱きかかえている。子宮に返そうという執念を持っ
ている。子どものほうからすると、こういうイメージを持っ
ているのです。大げさかもしれませんが、ある意味では大変
にリアルだと思う。足を引っ張られる身になって下さい。相
手の身になって思いやる。自分以外の人間に思いを託すとい
うことですね。

□母は三界の首枷

丸山薫の詩。「らいおん」

らいおん

丸山薫 かざる

「妾の希ひはただ一つ わがしゑ

どうぞこの児が大人になったら

あのらいおんのやうに強くなりますやうに」

「ぼくの希ひはたつた一つ

カステラのやうに肥つたこのお母さんを

ばくばくあのらいおんに喰はしてやりたい」

へ「妾の希ひはただ一つ / どうぞこの児が大人になつ

たら / あのらいおんのやうに強くなりますやうに」へこれ
は、自然な母親の願いです。では、息子のほうの願いは何で
しょう。へ「ぼくの希ひはたつた一つ / カステラのやうに
肥つたこのお母さんを / ばくばくあのらいおんに喰はして
やりたい」へすさまじいじゃないですか。笑いと悲しみがこ

ちゃまぜになるでしょう。ここが詩のおもしろさなんです。ね。中学生に読ませたら、ひざをたたいて喜びました。うーん、僕もこう言いたいわね。この子にしてみると、もううんざりしているのです。これは、亭主と女房にも当てはまりません。子は三界の首枷といます。子どもは、過去・現在・未来にわたって親を苦しめるということなんです。ところが、この子どもにとっては、母親が三界の首枷と言いたかったのではないのでしょうか。

もっとすごいのがありますよ。石川逸子の詩です。若い時の詩です。「彼ら笑う」

□子を食う母

彼ら笑う

石川逸子

「この子は手足が長すぎる」
子を食う母

朝に晩にばりばりと子の手足を食う母
血みどろの口と

慈愛の瞳

「わたしはお前のためを思っている
いつもお前のためを思っている」

子は逃げる

短くなった手と足で子は逃げる

母の沼 どぼぶの臭い放つ 沼から逃れようとも
がく

「誰か来て 息子が逃げる

どうかあの子をつかまえて」

髪ふり乱し わめく母

したたる涙

子は取り巻かれる

おとなしい隣人たちが子を囲み

次第にその輪をちぢめてゆく

「食べられたのはぼくです

流れたのはぼくの血だけなのです」

「悪いのはお前だ」「お前だ」

「ぼくの手足はぼくのものだ」

「ぼくはぼくの手足を守らねばならない」

「それでも悪いのはお前だ」「お前だ」

子はひとりぼっち 味方はない

大勢の手が彼をつかみ

またつなぐ 彼を その母の足元近く

灰色のきつい鎖に

「ぼくはあなたを憎む」

「わたしはお前を思っている」

「ああいっそぼくはあなたを殺したい」

「わたしはお前を思っている」

うっとり母はささやく

微笑みながら近付き

ばりばりと子の手足をしゃぶる

子は変ってゆく

朝に晩に手足を食われて子は変ってゆく

もう子は逃げようとしな

彼は静かに朝焼けをみつめ じっと一日の終りを待

つ

「わたしの息子 お前はやっとい子になった」

「彼は死んだのです 母さん」

「まあ お前ったらふざけて」

上機嫌に笑う母

俯向く子

「ごらん 実にいい風景だ」

「ええ 心あたたまる……」

遠く語りあう隣人

誰も彼も笑っていた

死んだ 或いは死にかかった子の魂はそっちのけ

に

笑っていた 実に楽しげに笑っていた

「この子は手足が長すぎる」／子を食う母／朝に
晩にばりばりと子の手足を食う母／血みどろの口と／慈
愛の瞳／「わたしはお前のためを思っている／いつもお
前のためを思っている」／手や足が長すぎると食っている
のです。これは、何と比べて長いといっているのかというと、
世間の常識と比べて長いといっているのです。長すぎては世
間ではやっていけない。だから、食って短くしてやっている
のだ。慈愛の心からです。真実この母親はそう思っているの
です。へ子は逃げる／短くなった手と足で子は逃げる／
母の沼 どぶどぶの臭い放つ 沼から逃れようともがく／母
親はどろ沼です。きれいな化粧をしても、あるメガネを
通してみると、どろ沼に見えるんです。へ「誰か来て 息子
が逃げる／どうかあの子をつかまえて」／髪ふり乱し
わめく母／したたる涙／子は取り巻かれる／おとなし
い隣人たちが子を囲み／次第にその輪をちぢめてゆく／隣
人たちも善意からやっているのです。お母さんが一生懸命に
なっているのに、その愛を裏切って逃げるとは何ということ
か、というわけです。へ「食べられたのはぼくです／流れ
たのはぼくの血だけなのです」／「悪いのはお前だ」お前

だ」／「ぼくの手足はぼくのものだ／ぼくはぼくの手足を
守らねばならない」／「それでも悪いのはお前だ」お前だ
これは、世間と子どもとの関係です。へ子はひとりぼっち味
方はない／母親は世間の常識に従っている。世間は常識に
基づいて裁いている。へ大勢の手が彼をつかみ／またつ
なく 彼を その母の足元近く／灰色のきつい鎖に／皆
さんも身震いするようなところですね。何か、遠いところで
のこのように思われますが、実は、これは、大なり小なり
皆さんの姿を映し出しているのです。そのことに気がつか
ないのはなぜか。お母さんは世間の常識を持っているからで
す。子どもをその型にはめこむことは実は恐ろしいことなの
です。へ「ぼくはあなたを憎む」／「わたしはお前を思っ
ている」／「ああいっそぼくはあなたを殺したい」／「わたし
はお前を思っている」へお母さんしてみると、真実、子ど
もを愛しているのです。しかし、子どもにしてみると殺した
いという。へうっとり母はささやく／微笑みながら近
付き／ばりばりと子の手足をしゃぶる／地獄絵ですね。た
だ、人間というものは不思議なもので、自分と子どもの関係
は絶対にこうではないと思っっている。しかし、このような詩

に出会うと、もしかすると、これは自分を映し出している鏡ではないかと感じる。文芸というのは、自分の心を映す鏡なのです。しかも強調して表すのです。へ子は変ってゆく／朝に晩に手足を食われて子は変ってゆく／もう子は逃げようとしなない／彼は静かに朝焼けをみつめ　じっと一日の終りを待つ／「わたしの息子　お前はやっといいい子になった」／「彼は死んだのです　母さん」／「まあお前たらふざけて」／上機嫌に笑う母／俯向く子／母親にとつては、やっとい良識的な常識的な子どもになったなあど安堵しているのです。子どもをあいているのです。そこところが難しいところなのです。母のその子を思う心が本当に子どものためになっているのか。もしかして、子どもの手足を食っていることにならないか。へ「ごらん　実にいい風景だ」／「ええ　心あたたまる……」／遠く語りあう隣人／誰も彼も笑っていた／死んだ　或いは死にかかった　子の魂はそっちのけに／笑っていた　実に楽しげに笑っていた／すごい詩ですね。このすごさというのが、実は、今日の家庭では日常化しているのです。受験地獄の中で何とかして一人前の人間にしたい。そのために母親は必死になっているのです。そう

いう母親の心境はぼくも良く分かります。しかしそれが、子どもの手足を食っていることにならないでしょうか。

では、つぎに母ではなく、女性についてです。

□女の一生

「玉ネギが走る」です。

一種の抽象画のようなものです。現代詩というのは、現実を、人間を、そのまま描くのではなく、このように例えて描くことが多い。

玉ネギが走る

小長谷清美

玉ネギが走っていく　廊下を抜けて台所の方へ
変なカタチだから変なカタチのままに

あの玉ネギはどこからやってきたか

鳥から裸のまま

そうじゃあなくて　あの玉ネギ

わたしたちのぬくとい場所 毛布をかぶった

毛布かぶった暖かい場所

わたしたちが日夜しがみついているベッドから

そのベッドから

ころんと落ちて コトバみたい

玉ネギは転がる 転がって走る

変なカタチだから変なカタチのままに

廊下を抜けて台所の方へ

水がいつも流れているあたりに向けて

玉ネギは走る

大急ぎで

まるで 湿度の多い日常のなかでは

どんなカタチにしなびるのかわかってるみたい

に急いで

ころげまろびつ取り乱して 玉ネギは走る

何かにおびえたコトバみたい

わたしたちの欲望が支配にかくれて栽培した

ツヤツヤひかった あの変なカタチ

変な性質を持つ

根類もどきの変なカタチの茎

むいてもむいても無意味さ輝く

皮膚つややかにひからせて 玉ネギは走って

く

どうせ最後は

フライパンの中だとわかっていても

へ玉ネギが走っていく／皆さんが走っていくのだと思っ
て下さい。へ廊下を抜けて台所の方へ／変なカタチだか
ら変なカタチのままに／あの玉ネギはどこからやってきた
か／畠から裸のままに／そうじゃあなくて あの玉ネギ
／わたしたちのぬくとい場所 毛布をかぶった／毛布か
ぶった暖かい場所／わたしたちが日夜しがみついているベッ
ドから／夫と妻のベッドです。男と女と考えて下さっても
いい。へそのベッドから／ころんと落ちて コトバみた
いに／玉ネギは転がる 転がって走る／変なカタチだか
ら変なカタチのままに／廊下を抜けて台所の方へ／水が
いつも流れているあたりに向けて／玉ネギは走る／大急
ぎで／どうですか。自分の姿、浮かんできましたか。へま
るで 湿気の多い日常のなかでは／どんなカタチにしなび
るのかわかっているみたいに急いで／いずれしなびるのです
ね。なんか、気持ちよくぼく話していますね。(笑)でも、
これ、ぼくが言っているのではないのです。女の詩人が言っ
ているのですから。(笑)へころげまろびつ取り乱して
玉ネギは走る／何かにおびえたコトバみたいに／わたし
たちの欲望が支配にかくれて栽培した／ツヤツヤひかった

あの変なカタチへ今は、つやつやな化粧をしてきれいだ
けれど、それは、結局、男の欲望、支配のために作り出され
た女の一つの姿なわけですよ。(笑)へ変な性質を持つ／根
類もどきの変なカタチの茎／むいてもむいても無意味さ輝
く／皆さんの毎日の仕事の意味です。日常の仕事は、それ
は必要ですが、さて、一つひとつのふるまいに意味があるの
だろうか。結局それは、今は、若くして、つやつやですが、
いずれはしなびてしまう。へどうせ最後は／フライパン
の中だとわかっている／ぼっくり死んでしまうわけです
よね。毎日毎日、ベッドと台所の往復でね。今はつやつやで
も、そのうちにしなびて死んでしまう。むなしいですね。こ
れは、ニヒリズムの世界です。明日から生きる力にならない
ではないかと、皆さん、お思いでしょうが、なぜ、こんな詩
を読むのかというと、わたしの人生は、無意味ではない、こ
ういう意味があるのだと、自信を持って言い返せるかという
ことです。こんな詩のようなどころがあるなという人は、明
日から玉ネギであることをやめればいいんです。ですから、
一見ニヒリズムの詩ですが、実は、私たちの生きてる姿を
まざまざと映しだしているのです。明日から玉ネギ食べられ

なくなりそうですね。「あなたもいずれフライパンね。」「わたしもいずれね。」なんて話しかけたりしてね。

□逆説的に

さて、永瀬清子さんの詩です。永瀬さんは、岡山出身の詩人です。先年亡くなりましたが、すばらしい詩人で、若い頃、宮沢賢治の作品をいち早く評価した人です。今でも引き合いに出されるすばらしい宮沢賢治論を書いています。また、妻でもあり、母でもありまして、そういう詩もたくさん書いておられます。子どもをレンズに例えて、一人なら一枚のレンズ、二人なら二枚のレンズというように、子どもを通して世の中が広く見えてくるという詩ですね。子どもから学び、今まで見えなかったものが見えてくるといった詩を書いているのです。

だまして下さい

言葉やさしく

永瀬清子

だまして下さい言葉やさしく

よろこばせて下さいあたくい声で。

世慣れぬ私の心いれをも

受けて下さい、ほめて下さい。

あゝ貴方には誰よりも私が要ると

感謝のほゝゑみでだまして下さい。

その時私は

思ひあがつて傲慢になるでせうか

いえいえ私は

やはらかい蔓草のやうにそれをとらへて

それを力に立ち上りませう

もつともつとやさしくなりませう。

もつともつと美しく

心きゝたる女子もねいになりませう。

あゝ私はあまりにも荒地地に育ちました

飢ゑた心にせめて一つほしいものは

私が貴方によるこぼれると

さう考へるよろこびです。

あけがたの露やそよ風のほどにも

貴方にそれがわかつて下されば

私の瞳はいき／＼と若くなりませう。

うれしさに涙をいつばいためながら

だまされだまされてゆたかになりませう。

目かくしの鬼を導くやうに

あゝ私をやさしい拍手で導いて下さい。

〈だまして下さい言葉やさしく〉 〈だまして下さい言

葉やさしく／＼よろこばせて下さいあたゝかい声で。／＼世

慣れぬ私の心いれをも／＼受けて下さい、ほめて下さい。／

あゝ貴方には誰よりも私が要ると／＼感謝のほゝみでだま

して下さい。／＼その時私は／＼思ひあがつて傲慢になるで

せうか／＼いえいえ私は／＼やはらかい蔓草のやうにそれを

とらへて／＼それを力に立ち上りませう／＼もつともつとや

さしくなりませう。／＼もつともつと美しく／＼心きゝたる

女子になりませう。〉と決意するわけです。この詩は、夫た

るもの妻には読ませたくない詩ですね。(笑) 〈あゝ私は

あまりにも荒れ地に育ちました／＼飢ゑた心にせめて一つほ

しいものは／＼私が貴方によろこばれると／＼さう考へるよ

ろこびです。〉あなたにとってなくてはならない存在だと思っ

てもらうのが幸せです、と言っているのです。これは、夫に

とっても同じですね。〈あけがたの露やそよ風のほどにも

／＼貴方にそれがわかつて下されば〉と、男はなかなかそれ

がわからないのですよね。〈貴方にそれがわかつて下され

ば／＼私の瞳はいき／＼と若くなりませう。〉これは、考え

方によっては、だんなにもいいことなんですよね。〈うれ

しさに涙をいつばいためながら／＼だまされだまされてゆた

かになりませう。／＼目かくしの鬼を導くやうに／＼あゝ私

をやさしい拍手で導いて下さい。〉なんだか、真面目なんだ

か、不まじめなんだかわからなくなってくるでしょうが、こ

こがおもしろいところなんです。真面目にいったらけんか

になってしまふ。一方がそういうふうになると、他方もそう

なってしまうということ、これを相関関係というのです。大

切なところ。す。

こちらがやさしい言葉をかけると、相手もやさしい言葉で

答えるという、どっちが先ということはありませんから、早

速今日やってみて下さい。ピンポンのように何度かやってい

ると、冗談でも、だましてでもいいですからね、やさしい言葉をかけあっていくとそのうち、本当になってくるのです。だまされたと思つてやってみるのです。こういうのを相関関係と言います。持ちつ持たれつですね。人間関係の出発点です。よく先生や、親も、一方的にしてあげているんだと思いがちですが、子どもから学び、一緒に育っているんだと考えることが大切です。与えることが、いただくことなのだ、という相関関係です。

ここでちょっと思い出したことなのですが、北海道には竹やぶはありませんが、初夏、竹の秋というのですが、葉が黄色くなって落ちるのです。本州ではしょっちゅう目にすることができまるのですが、余りにされません。俳句にも季語としてあります。ところが、植物の専門家に聞きますと、竹というのは、下で全部つながっているのだそうで、地下茎からたけのこが出て大きくなる。そして、葉を落とす前に、葉にあった栄養を全部茎に戻すのだそうです。そして、地下に送って子どもを育てる。そして若竹が育ちますと、前に枯れてしまった竹はどうなるのでしょうか。知りたいでしょう。

(笑) 授業というのはこういうふうにするのです。

さて、子どもの竹は成長して光合成をして、こんどは地下茎を通して親に栄養をお返しするのです。そして、また、青々とした葉を茂らせることができる。竹でさえこうなのですから、まして人間は……、人間の親子がそうでなかったら、竹に恥ずかしいですよ。真実に触れると感動しますね。それを人間になぞらえて、考えるのです。子どもと親、こういう関係だといいですね。あまり言うのと当てつけがましくなりますから、時期を見て、言うようにしなさいといけませんね。さて、この話を私がもう少し広げてみます。近所の人達とのつながりがありますよね。これは、網の目に例えられるのです。親だけが子どもを育てているのではない。回りの竹も育てているのです。それは、たとえば親戚であり、近所であり、先生や友達もそうですね。いろいろな網の目があります。この網の目のような関係があるのです。そこでその、網の目について見事に表した詩がありますので紹介します。高見順という人は、最後の文士と言われた人で、ずっと小説を書いていましたが、晩年、老いの詩があってもいいのではないかと、詩を書き始めたのです。

天 高見順

どの辺からが天であるか

鷹の飛んでゐるところは天であるか

人の眼から隠れて

こゝに

静かに熟れてゆく果実がある

おゝ、その果実の周囲は既に天に属してゐる

へどの辺からが天であるか、天というのは、もともとは、中国の言葉です。天子という言葉がありますね。天からの命を受けてこの世を統治する人のことです。人々が幸せにあるように、です。しかし、人々が幸せでない世の中になると、天からの命がはたされていないことになるので、天子の

首をすげ替えるのです。これを革命といいます。大宇宙の意志というのでしょうか、そういうものを天というのです。娑婆の地獄の世界ではなく、崇高なるものです。高見順は、

へどの辺からが天であるか、と聞いていますね。へ鷹の飛んでゐるところは天であるか、と聞いています。高いところと考えますが、へ人の眼から隠れて、こゝに、静かに熟れてゆく果実がある、おゝ、その果実の周囲は既に天に属してゐる、この詩はちょっとむづかしい。ゆっくりとわかるまでお話します。へ人、がいます。果実は眼の前にあります。ここは既に天であるといえるのか、また見ている私も天に属しているといえるのであるか。本当にそうなのか。いわば哲学的な詩です。細かい絵解きをしましょう。どうやら果実が熟れるのか。土があり、雨風があり、水が根から吸い上げられ、太陽の光があり、空気があり、虫が飛んできて、鳥が飛んできてその実を食べ、種を遠くに運び、そこでまた芽を出す。鳥にとっても、果実にとってもいいわけです。おたがいが支えあっている。一個の果実が熟れるためには天地自然のすべてが関わっているのです。果実を取り巻く一切が果実を生かし、生かされているのです。この煩惱の世界が、

仏教の言葉で言うと娑婆ですね。この世界が言い換えれば淨土であり極楽であり、天国なのです。天国といえどこか遠くを思いますが、実はこの汚れに満ちた世界がまさに、一個の芽を熟させている淨土であり極楽であり天国なのだ。さあ、ここですね、この果実を私だと言いかえて考えてみてください。今ここにいる私や皆様には、生んでくれた母や父があり、夕方食事をなさったと思いますが、米を作る人がおり、魚を捕る漁師がおり、服を作る人がおり、また、羊を飼う牧童もおりと、この世のありとあらゆるものがここに集約されるのです。そして、わたしもあなたたちも生きているのです。

仏教の經典に『華嚴教』というお経がありますが、その中に、へ一即一切という言葉があります。どういうことかといえますと、私が私であるためには一切すべてのものに支えられているのだということです。へおかげさまで」という言葉がありますね。誰のおかげなのですか。実は、すべての人のおかげ、いやすべてのもののおかげ、つまり一切のものに支えられているのです。逆に言うと、わたしは一切のものを支えているのです。与え、与えられ、持ちつ持たれつという

ことです。

さて、インドにはインドラという神がいます。日本では帝釈天という神様ですが、その神様の宮殿に網がかかっているのです。その網のことをインドラの網というのですが、世界は、時間的に数え切れないほどの相互依存関係によって織りなされた無限の因果の網のごときものであり、このことがまさにインドラの網によって比喻されているのです。へ重々無尽の法界縁起」といっています。またへ因陀羅網法界門」とはへ重々無尽に即入」としている関係を表したものです。因陀羅網とは、インドラ神の網であり、網は網の目によって重々無尽に交錯しているように、一重の相入関係のみを説くのではなくて、重々の相入を説くのです。インドラ網の目ごとに宝珠をかけ、その宝珠が照らし出すところ、光明赫々として、一大光明の世界が出現する。というのは、網というのは、このようになっていますね。網の目の一つひとつがあなたであり、私なのです。それが、重々重なり合って、過去、現在、未来とまた重なり合っている。そこにあるもの一つひとつが宝珠である。ダイヤモンドみたいな、そこに明るい光が来ると、それぞれが光り輝き、おたがいにお互いに照らしあいきらめきあ

うので、全体が燦々と輝きあうのだという世界観です。これは、おたがいに助け合いであるということなのです。ですから、皆さんも、子どもたちやご主人から与えられ、与えていると考えていいのですね。例えばぼそい光だとしてもです。そうすると、また、違った光がかえってくるのです。そこで、いかに生きるべきかということなのですが、おたがいに影響しあっているということですから、自分が変わることによって相手が変わるのです。また、回りが変わることによって自分が変わります。これを宮沢賢治はすばらしい言葉でいっています。

〈世界が、全体幸福にならない限り、個人の幸福はあり得ない〉自分のことだけを願ってはいけません。

□自己主張の矛盾

新川和江さんの詩です。

わたしを束ねないで

新川和江

わたしを束ねないで

あらしいとうの花のように

白い葱のように

束ねないでください わたしは稲穂

秋 大地が胸を焦がす

見渡すかぎりの金色の稲穂

わたしを止めないで

標本箱の昆虫のように

高原からきた絵葉書のように

止めないでください わたしは羽撃き

こやみなく空のひろさをかいさぐっている

目には見えないつばさの音

わたしを注がないで

日常性に薄められた牛乳のように

ぬるい酒のように

注がないでください わたしは海

夜 とほうもなく満ちてくる

苦い潮 ふちのない水

わたしを名付けしないで

娘という名 妻という名

重々しい母という名でしつらえた座に

座りきりにさせないでください わたしは風

りんごの木と

泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで

リヤ・いくつかの段落

そしておしまいに「さようなら」があったりす

る手紙のように

こまめにけりをつけないでください わたしは

終りのない文章

川と同じに

はてしなく流れていく 拡がっていく 一行の

詩

へわたしを束ねないでへわたしは個性があるのだ、一緒

くたにしないで下さいといっているのです。自分を個と捉えているのです。へわたしを止めないでへわたしを固定化しないでくれといっているのです。レットルを貼るなというのです。わたしを一カ所に止めないでくれといっているのです。これは、近代の個人主義の主張を述べているのです。へわたしを注がないでへわたしを名付けないでへ妻という看板をつけないでくれ、へわたしは風へ風のように好きなところに行きたいのです。自由でありたい。母親というような名前前で縛らないで下さい、という意味です。みなさんも言うてみたい気持ちありますよね。これはまさにアイデンティティというのです。自分はまさに自分だといいたいのです。へわたしを区切らないでへ今のわたしを見てそれでそれがわたしだと思わないでほしい。発展していくのだと。これは、詩というものがどういうものかということを書いてあるのと同時に、わたしという自分を主張している詩であるのです。これが、近代の詩の極致といっているですね。つまり、明治以降、こういう道をたどり、ここにたどり着いたわけです。自己主張、個性の尊重、個人主義です。これはこれとして立派な生き方なのですが、現在、残念ながら壁にぶつかっている。

自分は自分なんだという考えは、壁にぶつかっている。日本だけでなく諸外国も同じです。いろんな矛盾が出てくる。いろいろな女性を主人公にした小説があります。有島武郎の「或る女」から始まり、樋口一葉の「にこりえ」にしても宮本百合子の「伸子」にしても、川端康成の「雪国」とか「古都」とか、野上八重子の「真知子」とか、いくらでもあります。大岡昇平「武蔵野夫人」、安部公房「砂の女」、木下順二「夕鶴」、有吉佐和子「紀ノ川」、李恢成の「砧をうつ女」などです。これらすべての女主人公はこのような考え、主張を持っていたのですが、結局悲劇に終わっているのです。自己主張をすればするほど、日本の場合、日本の現実の中では悲劇のヒロインにならざるをえない。これは、時代社会の問題と同時に、個人の悲劇である。

□生かし生かされる（共生）の生き方

本当の幸せというのはどうしたらいいのか。自分を生かすと同時に人も生かすと言う考え方。世界が全部幸せでなくて、という宮沢賢治のこの考え方はすばらしいと思うのです。わたしはこの綱の目の一つなんだ。その上に輝く宝石の一つ

なんだ。回りをたくさんの宝石に取り巻かれ、おたがいに光をやりとりして、生かし生かされて存在している。そういう考えです。これは、自己主張がだめだといっているのではなく、大きな我になるのです。（一即一切）わたしはちっぽけな一個の玉ではなく、わたしを取り巻くすべてを含めた一切であるといえ、これは、自己の拡大、自己の拡充といっているのではないでしょうか。決して、小さくせせこましく考えることではない。それが、おれはおれ、人は人となると、一個の自分の中に閉じこもってしまう。それは本当の自己主張とはならない。本当の自分のすばらしさや貴さを認識することにならない。わたしは、すべてのものに生かされ、すべてのものを生かしているという考え方はすばらしいと思います。そういう世界観、人間観を持って生きていくのです。では、明日から具体的にはどうするのか。それは皆さん一人ひとりが考えることであって、わたしが教えることではありません。また教えられるものでもありません。では、お約束の時間が来しました。これで終わりにしたいと思います。

付 一 講演演資料 一

母を思ふ

高村光太郎

夜中に目をさましてかじりついた
あのむつとするふところの中のお乳。

「阿父おとうさんと阿母おあはさんとどつちが好き」と
夕暮れの背中の上でよくきかれたあの路次口。

鑿のみけがで怪我をしたおれのうしろから
切火をうつて学校へ出してくれたあの朝。

酔よひしれて帰つて来たアトリエに
金釘流のあの手紙が待つてゐた巴里パリの一夜。
自分の一生も望もすてたあの凹んだ眼。

やつとおれのうちの上り段をあがり、
おれの太い腕に抱かれたがつたあの小さなからだ。

さうして今死なうという時の
あの思ひがけない動感ある姿すがた貌ぼう。

母を思ひ出すとおれは愚ぐにかへり
人生の底がぬけて

怖いものがなくなる。

どんなことがあらうともみんな
死んだ母が知つてゐるやうな気がする。

印鑑

清岡卓行 たかゆき

長い間ぼくの手もとにあるふしぎな物。
十六歳のとき 母がくれた象牙の印鑑。
それだけが戦争や結婚を越えて ぼくの
もう一本の指のように血を滲ませている。

糸針

深尾須磨子

何となく人なつかしくなる度たびに
きまつて糸と針をとり出す寡婦寡婦のわたしだ
別に縫ふほどのものとははないのだが
糸と針をいぢりながら
亡き母を懐なつかふのが
そんな場合
わたしには何よりも真実なことだから

糸と針とをいぢつてゐると

次第に母とわたしの区別がもうろうとなつて来る
父に遺あされた多勢の子供を

糸と針とで育てなければならなかつた
彼女は古い女性であり

没落の家の寡婦だった
慢性になりきつた肩の凝りと歯痛を堪えて

辛い人生をおぼつかなくも縫ひながら
彼女はよくも徹夜の三番鶏を聞いた

お母さん！ さぞ辛かつたでせうね

わたしの眼は次第に水だらけになり
つひつひ糸がとほせなくなるのだ

母の瞳

八木重吉

ゆうぐれ
瞳をひらけば

ふるさとの母うえもまた
とおくひとみをひらきたまいて
かわゆきものよといいたもうこちするなり

遠い笛

室生犀星

虹がきらきら立つた城のなかで
ゆるい笛がつついて
そして嬰兒はぽつかりと目をさました

白いさびしい光があつた
だが笛の音色はしなかつた
どこに母親の顔があるのか
かたかけの障子はかりが白く見えた

よく見ると　すぐ顔のちかくに
紛ふ方もない母親が
その静かな瞳で眺めてゐた
それゆゑ嬰兒は一時に悲しくなつて
こゑを上げて泣き出した

子守唄

室生犀星

雪がふると子守唄がきこえる
これは永い間のわたしのならはしだ
窓の戸口から
空から

子もりうたがきこえる
だがわたしは子もりうたを聞いたことがない
母というものを子供のときにしらないわたしに
さういふ唄の記憶があらうとは思へない

だが不思議に
雪の降る日は聴える
どこできいたともない唄がきこえる

良い心

犀星

月のごとき母は世にあるまじよ
良きころのみ保てる女もあるまじよ
われら良しとなすもの
われら恭ふものに何時の日か行き逢はなむ。
何時かまた月のごとき母に逢はなむ。

若き日のあやまちを

きみもまたなしたまひしか

過ちは遂についにあやまちにはあらず
母びとよ

われ生きてもの書くすべを覚えければ
いましが過ちをたづね参らすべし
いましが悲しみをつづり参らすべし

船乗りの母

佐藤惣之助

息子は青い地球の玉を

二度も三度も廻つて来た

柘榴色の日のさす横の方の海原うなだちにゐたり

真下の異国の港にゐたり
赤道の帯を幾度もまたいで来た

しおし母は田舎にゐて

忍冬や野苺でこんがらがった

垣根の内へ鶏を追ひこみながら
一日ボロを縫つてゐる

世界は大きい

地球も大きい

息子は地球をとぶ木靴をもつてゐる

しかしどこへも行かない母親は

世界の田舎を雌鶏のやうに抱いてゐる

古い機織部屋

大江満雄

ふりむくとき

古い機織部屋が見える。

(あれは おかあさんの機織部屋。)

ふりむくとき

機を織る音がきこえる。

(あの部屋で おかあさんが機を織っていた。)

ふりむくとき

古い大きな屋敷が見える。畑が見える。山が見える。

(あれは おかあさんの生れた家 生れた村。)

ふりむくとき

鐘の音が聞こえる。

(あれは 三十年まえの夕ぐれ 時は連続し
このように不連続。)

ふりむくとき

海辺の山が見える。

(あそこには おかあさんの墓がある。)

ふりむくとき

波の音が聞こえる。

(あそこで おかあさんと貝がらをひろった。)

ふりむくな　ふりむくな
無量の愛をうちにしたときに　別れを告げよう。
(わたしたちは前へ　すすまなければならぬ
から。)

母について

菅原克己かつみ

——桂小五郎のようなもんだ、
母はため息をつくようにして言い言ひした。
そのくせ、
そんなにいい世の中が必ず来るものなら、
なにもあんたまでやらなくとも
いいじやないか、とも言つた。
いくらか暗い六畳の部屋、
病気の母はベッドの上で
何時も煙管たばこの音をたてていた。
警察に連れて行かれる前、
母は両手を胸において、死んだ。
その日は庭さきに燕が来てよく啼き、
いい日だこと、と母はぼんやり言つて
あとは安らかな寝息をたてていた。

——桂小五郎のようなもんだ、
留置場の中で、私はときどきつぶやいた。
思ひ出はすぐ母のため息となつて
私の耳に聞えて来た。
その老いたる考えの範囲いつばいに、
分らぬ所は愛情でおきないながら、

私たちの仕事を理解しようとしてとめた
あのいい母はいつもいた、すぐそばにいた。
私は二十四、
夜になると虱だらけの毛布にくるまつて
母のことを思ひだす年頃であつた。

二月

井上靖せいし

父と私を棄てた母、その母が今宵、背戸のくぬぎ林
の中に一人俯向いて立っている。曾て犯せし過誤とがごの
如く、母の面おもては今も尚、若く美しいに違ひない。
私は時折そつと暗い窓外を見遣りながら、父に聞か
せるために、さむざむと書物の頁をめくるのであつ
た。父はもう長いこと病床に横たわつて、毎夜の如
く、私の読む書物に耳を傾けながら、いつか眠りに
おちる習慣だつた。

深夜、私は父の寝息をうかがつて、そつと窓から忍
び出た。深合の道を降りて行くと、くぬぎ林のあち
こちに、梅の花が白々と開いていた。併し母の姿は
どこにも見えず、只刺客の息をひそめた幾つもの眼
が、冷たい夜気の底からじつと私を窺っているので
あつた。

らいおん

丸山 薫 かある

「妾めかけの希ねがひはただ一つ
どうぞこの児が大人になつたら
あのらいおんのやうに強くなりませうやうに」

「ぼくの希ねがひはたつた一つ
カステラのやうに肥つたこのお母さんを
ぱくぱくあのらいおんに喰はしてやりたい」

おつかさん

谷川俊太郎

地球はジェット機をつかまえて
大地の胸に抱こうとする

地球は潜水艦をひきずりこんで
海の子宮にかえそうとする

宇宙にやきもちをやいている
わからずやおつかさん

地球はあいかわらず
私たちの足をひっぱる

私たちはもう思春期だつていうのに
もうそろそろ月にさわろうという年頃なのに

抱かれています赤ん坊

高良留美子 こうらるみこ

抱かれています赤ん坊は歩かない。だから赤ん坊は
第一脚が発達しない。

抱かれています赤ん坊は歩かないから、ほかの赤ん坊や玩具や犬にけつまづかない。ほかの赤ん坊にはほかのおっぱいの匂いがついているし、ほかの玩具にはほかの持主がいる。抱かれています赤ん坊はそんなことを何にも知らない。よそのひとに対しては気の弱い微笑を身につけるが、他人が何だか少しも知らない。いつもあんまり近くににいるから、母親をよく見たことがない。だから大きくなつても母親については、そのあたたかさ以外何にも憶えていない。

母恋餓鬼

寺山修司

鬼あり、母と名づく、髪なかばしろく、おもてになみだふたがりて子を見ることあたはず。裏町のアパートに棲みて、老後やけつく渴きにくるしみつつ、子のために冬着縫ひ、子守唄をとなふ。この鬼、ときとして飢渴の火、みのうちをやくたへがたさに、水をもとめて階段をおりゆくことあり。鬼の子、息子といへるもの、水を守りてゐしが、鬼来たるを知りて洗面器にあふるる水をもちて、夜の闇へ逃ぐるなれば、鬼、水をもとめて、子を逐ひ擲たむばかりにはしりまどふ、そのさまは、さながら走る火鬼、ふりみだしたる髪も、追へる大股も子には及ばず。つひにあきらめて、水もち去りしわが子の、あしあ

とのしたたりをねぶりにのちを生く。そのねぶる舌の音、かなしきまでに高架線路をへだてたる他のアパートにとどくなり。その子二十歳、しみじみと洗面器の水におのが顔をうつし見てゐるしが、やがてそれを捨つるなり。

風

伊藤 整

風が激しく吹きつゝの夕方
子供がむづかつて泣く。
母は邪険にそれを叱りとばす
裏の林を風が落ちつきなく吹きすぎ
木や草はざわざわと葉をかへしてゆれる。
こんな時には
子供の心に
頼りない涙が込み上げてくるのだ。
子供はいつまでもすゝり上げてゐる。
母はそれを叱りつけて
急がしく夕餉の支度をする。

鬼

菱山修三

私は五つの子供だった。玄關の格子に私は上っていた。そして戸外を覗いていた。雨模様、ぼんやりと暗い戸外を。

——表には、母が鬼がいると云った。

私はようやくやく二十を越した若ものだった。座り慣れた机に向つて、私は原稿用紙の反古を重ねていた。そして誰かが私に囁いていた、刃ものを頸すじに加えることしかないと。
——身のまわりには、夥しい破れた扇の骨がじっさい散っていた。そのなかには昔の鬼の白い歯もまじっていた。

私は玄關で泥靴を脱いでいた。すると私は思い出していた、母のなかにも鬼がいたと。やさしい手をした鬼が。……

愛は終了され

萩原恭次郎

母の胸には 無数の血さへにじむ爪の跡！
あるひは赤き打撲の傷の跡！
投石された傷の跡！ 齒に噛まれたる傷の跡！
あゝそれら痛々しい赤き傷は
みな愛児達の生存のための傷である！

忘れられぬ乳房はもはや吸ふべきものではない
転居の後の如く荒れすたれ
あゝ 愛はすでに終了されたのだ！

さるを今 ふたゝび母の胸を蹴る！
新らしき世紀の恋人のため！
新らしき世界に青年たるため！
あゝ われ等は古き父の遺産を
見事に破壊するを主義とする！

彼ら笑う

石川逸子 いっし

「この子は手足が長すぎる」

子を食う母

朝に晩にばりばりと子の手足を食う母

血みどろの口と

慈愛の瞳

「わたしはお前のためを思っている

いつもお前のためを思っている」

子は逃げる

短くなった手と足で子は逃げる

母の沼 どぶどぶの臭い放つ 沼から逃れようとも

がく

「誰か来て 息子が逃げる

どうかあの子をつかまえて」

髪ふり乱し わめく母

したたる涙

子は取り巻かれる

おとなしい隣人たちが子を囲み

次第にその輪をちぢめてゆく

「食べられたのはほくです

流れたのはほくの血だけなのです」

「悪いのはお前だ」「お前だ」

「ほくの手足はほくのものだ

ほくはほくの手足を守らねばならない」

「それでも悪いのはお前だ」「お前だ」

子はひとりぼっち 味方はない

大勢の手が彼をつかみ

またつなぐ 彼を その母の足元近く

灰色のきつい鎖に

「ほくはあなたを憎む」

「わたしはお前を思っている」

「ああいっそほくはあなたを殺したい」

「わたしはお前を思っている」

うっとり母はささやく

微笑みながら近付き

ばりばりと子の手足をしゃぶる

子は変ってゆく

朝に晩に手足を食われて子は変ってゆく

もう子は逃げようとしな

彼は静かに朝焼けをみつめ じっと一日の終りを待

つ

「わたしの息子 お前はやっとい子になった」

「彼は死んだのです 母さん」
「まあ お前ったらふざけて」
上機嫌に笑う母
俯向く子

「ごらん 実にいい風景だ」

「ええ 心あたたまる……」

遠く語りあう隣人

誰も彼も笑っていた

死んだ 或いは死にかかった 子の魂はそっちのけ
に

笑っていた 実に楽しげに笑っていた

玉ネギが走る 小長谷清美

玉ネギが走っていく 廊下を抜けて台所の方へ
変なカタチだから変なカタチのままに

あの玉ネギはどこからやってきたか
畠から裸のまま

そうじゃあなくて あの玉ネギ

わたしたちのぬくとい場所 毛布をかぶった

毛布かぶった暖かい場所

わたしたちが日夜しがみついているベッドから

そのベッドから
ころんと落ちて コトバみたい

玉ネギは転がる 転がって走る

変なカタチだから変なカタチのままに

廊下を抜けて台所の方へ

水がいつも流れているあたりに向けて

玉ネギは走る

大急ぎで

まるで 湿気の多い日常のなかでは

どんなカタチにしなびるのかわかっているみたい

に 急いで

ころげまろびつ取り乱して 玉ネギは走る

何かにおびえたコトバみたいに

わたしたちの欲望が支配にかくれて栽培した

ツヤツヤひかった あの変なカタチ

変な性質を持つ

根類もどきの変なカタチの莖

むいてもむいても無意味さ輝く
皮膚つややかにひからせて 玉ネギは走ってい
く

どうせ最後は
フライパンの中だとわかっていても

わたしを束ねないで 新川和江

わたしを束ねないで

あらせいとうの花のように

白い葱のように

束ねないでください わたしは稲穂

秋 大地が胸を焦がす

見渡すかぎりの金色の稲穂

わたしを止めないで

標本箱の昆虫のように

高原からきた絵葉書のように

止めないでください わたしは羽撃き

こやみなく空のひろさをかいさぐっている

目には見えないつばさの音

わたしを注がないで

日常性に薄められた牛乳のように

ぬるい酒のように

注がないでください わたしは海
夜とほうもなく満ちてくる
苦い潮 ふちのない水

わたしを名付けしないで

娘という名 妻という名

重々しい母という名でしつらえた座に

座りきりにさせないでください わたしは風

りんごの木と

泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで

つや・いくつかの段落

そしておしまいに「さようなら」があったりす

る手紙のように

こまめにけりをつけないでください わたしは

終りのない文章

川と同じに

はてしなく流れていく 拡がっていく 一行の

詩

だまして下さい

言葉やさしく

永瀬清子

だまして下さい言葉やさしく

よろこばせて下さいあたゝかい声で。

世慣れぬ私の心いれをも

受けて下さい、ほめて下さい。

あゝ貴方には誰よりも私が要ると

感謝のほゝゑみでだまして下さい。

その時私は

思ひあがつて傲慢になるでせうか

いえいえ私は

やはらかい蔓草のやうにそれをとらへて

それを力に立ち上りませう

もつともつとやさしくなりませう。

もつともつと美しく

心きゝたる女子むすめになりませう。

あゝ私はあまりにも荒れ地に育ちました

飢ゑた心にせめて一つほしいものは

私が貴方によるこばれると

さう考へるよろこびです。

あけがたの露やそよ風のほどにも

貴方にそれがわかつて下されば

私の瞳はいきくと若くなりませう。

うれしさに涙をいつばいたためながら

だまされだまされてゆたかになりませう。
目かくしの鬼を導くやうに
あゝ私をやさしい拍手で導いて下さい。

天 高見 順

どの辺からが天であるか

鶯の飛んでゐるところは天であるか

人の眼から隠れて

こゝに

静かに熟れてゆく果実がある

おゝ、その果実の周囲は既に天に属してゐる

縁起説のもつとも基本的なものは、原始經典に説く

これあればかれあり、これ生ずるが故にかれ生ず、

これなければかれなし、これ滅するが故にかれ滅す

という真理である。また、龍樹はいう。

縁起せるところのもの、われらはそれを空と説く。

それは仮名であり、それはすなわち中道である。

〈万物流転〉と〈相對依存〉とは因縁のことわりから生

れた二つの原理といえよう。縦（時間的）から見れば万物流転、横（空間的）から見れば相對依存、この二つの原理はわれわれが眼前の真相をありのままに見るならばうなずかないわけにいかない、平凡にして嚴肅なる事実なのだ。

『勝鬘經』に「花咲く縁が集まって咲き、葉は散る縁が集まって散る。ひとり咲き、ひとり散るのではない。」とある。すべてのものが、衆の縁によって成るとする（衆縁所成）によってやまなしの実は熟し、そして落ちるのである。『勝鬘經』は、このことを、〈網の目が、互いにつながりあって網を作っているように、すべてのものは、つながりあってできている〉ともいう。

世界は時間的に数えきれないほどの異時の連続した因果関係と、空間的にも数えきれないほどの相互依存関係によって織り成された無限の因果の網のごときものであり、このことがまさにインドラの網によって比喩されているのである。

このことを法華經は「重々無尽の法界縁起」という。

法藏は〈因陀羅網法界門〉に、このことを説いて、言う。

因陀羅網法界門とは、重々無尽に即入している関係をあらわしたものである。因陀羅網とはインドラ神の網であり、網は網の目によって、重々無尽に交錯しているように、一重の相入関係のみを説くのではなくて、重々の相入を説くのである。インドラ網の目ごとに宝珠をかけ、その宝珠が照らし出すところ、光明赫々として一大光明の世界が出現する。

付（参加者の感想）

川瀬 敏子

九月七日、午後六時三十分より、緑小学校を会場に、第一回市P連婦人代表者研修会が開催されました。

全国文芸教育研究協議会会長の西郷竹彦氏の「文学にみる日本の女性」の講演を聞かせて頂き、十二編の詩を通して、母親とは、何とかして子供を一人前に育てたい一心で、子供と触れ合っているが、時には子供の足手まといになったりしている、母であるのは、子供をもっているからであり、母親になったからこそ色々なことを学ぶ、そして母になって良かったと思える喜びがある、また、自分は自分と自己主張すればするほど、個人の悲劇がある、すべて世の中は、もちつもちれつ存在している、というお話を聞かせて頂き、すべてのものに生かされているということは自分一人、孤立しているのではなく、一切のものに、ささえられている、生きている自分を深く見つめることができました。

また、父母がいたからこそ、今の自分があり、私自身、母親になったからこそ、子供と触れ合い、色々な事にぶつかりながら、成長出来るのだと思わせて頂きました。

具体的に、明日からどう生きればいいのか、それは自分で決めていくというお話を聞いて、今日一日を精一杯喜びと感謝で生き、自分を反省しながら、明日に向かって、希望をもって歩んでいきたいと思いました。

また、いつも自分を励まし、相手を勇気づける自分でありたいと思いました。そして、いつでも、どこでも、だれにでもお陰様でとあいさつが出来る自分にならせて頂きたいと思いました。

私は、この研修会に何う前まで、文芸学の先生のご講演とお聞きして、実はちょっと緊張していました。しかし、西郷先生のお話を、最初から最後まで、とても興味深くそして楽しくお聞きすることができたのは、先生が私達に合わせて「母」というテーマでお話をしてくださいだったからだと思います。詩の一節、一節を解説していただくうちに、私は大きくうなずいていました。

「文芸とは、人の心を拡大して写す鏡ではないか」と先生はおっしゃいましたが、確かにそれは、私が今まで通ってきた道であり、現在であり、これから通るであろう道だということを、ご紹介いただいた詩から、切々と感じられました。

また、相関関係のご説明の中で、「竹秋」のお話は、私に大変な感動を与えてくださったと共に、「子育てとは、決して一方的ではなく、親もまた子によって教えられながら、一緒に成長していくものである」という思いを新たにさせてくださいました。

そして何よりも、私達人間の生活は、この世の中の全てのものによってささえられていることを切に感じ、この「一即一切」の教えを、子供達に伝えられる母親になりたいと、私は強く思いました。

小池 美津枝

「文学にみる日本の女性」という演題を読んだ時には正直に申しますと、とても難しく退屈な内容だろうと先

入観を持っていました。はるばる北海道へお越しにいただいた西郷先生に対して大変失礼な考えだったと深く反省して居ります。一時間半という時間が思いのほか短く感じられ、易しくわかりやすい言葉づかいでした。それは先生のお人柄から来るお気遣いの表れでしょうか。何より感心したのは、今回のテーマを私達母親にしぼり、「詩」をあじわい乍らも家庭での躰、親の反省点を、おしつけがましい云い方ではなく各人が心に学びとったり、反省したり出来る何かを呈示された点です。何篇かの詩の中には様々な母親像が出てきました。会場の皆様もどれかにあてはまったのではないのでしょうか。私が母としてショックを受けた詩があります。それは「彼ら笑う」です。彼らとは母親やまわりの大人達のことを指しています。子供を一人前に育てようと必死になっている姿が本当に子供の為になっているのか、また世間の常識でしばらくとしていた事が子の手足を食うごとく子の自由を奪っている事に彼らは気がついていない。手足を食われ逃げることの出来なくなった子を見て彼らは満足そうに笑っているという内容でした。私達が子供の手足を食べているのではないか思い返してみませんか、問いかけているのです。少しユーモラスな「玉ネギが走る」という詩もあります。玉ネギとは母親のことを指しています。なぜ沢山の野菜や果物の中で母親が玉ネギなのかを考え、何となくうなずけるのが情けなくもあり楽しくも感じました。詩はただ読むだけでピンと来ませんが、先生の説明を聞いて、短い文章の中で沢山の意味が込められているのに驚きます。大変勉強になりました。

斉藤 宏子

西郷竹彦先生の『文学にみる日本の女性』という講演を聞いてまいりました。貴重なお話をたくさん聞くこと

ができ、七十五才でバリバリな先生のお姿に感銘致しました。文学の歴史は永く、女性を題材にしているものがたくさんあるということで、今回は『詩』を中心に色々とお話をしておきました。「戦前戦後、そして現代とは、母親に対する子供の感性が少しずつ変化している。戦前戦後、男の子は母親を理想として美化し、あこがれの母親像を現している。しかし、現代にいたっては、母親が子の足かせになっている。母親は、世間の常識、世間の基準にあわせて子を育てている。」先生のこの言葉は、私の胸に波紋を投げかけてくれたように思います。私は子育てをするうえで、世間の常識、世間の基準、こういうことを気にして来たように思います。私も子供の足かせになっていたのだろうかと思う反面、いずれ子供は巣立って行くのだから、その時に足かせをはずしてやればいいのであって、それまでは足かせになっていてもいいのではないか、だって子供が一人前になるまでは、親の責任なのだから、そう思いませんか。

インドラの網のお話も大変参考になりました。自分が世界をつなぐ網の目のひとつなんて考えてもみませんでした。視野がせまいのでしょね。正直言って、家族、学校、近所、それと趣味でつながっている仲間、この範囲のことしか考えていなかった、また、それだけで精一杯です。でも先生のお話を聞いてこれからは、少し視野の範囲を広げてみたいと思います。相関関係ということで竹のお話がありました。竹とは、あの竹林のことです。「竹は全てが根でつながっており、竹の親は、自分の栄養を子に与え、子が育つと今度は、子が自分の栄養を親に与える。そうやってお互いに成長している」ということです。子供を生み、育てているおかげで、大人の目では見ることのできないもの、子供の目を通してたくさんのことを学ばせてもらっている、私も子供達から栄養をもらって成長しているのだと思いつつ先生のお話を聞かせてもらいました。